

タンザニア・ポレポレクラブ

2020 年度 事業報告書



タンザニア・ポレポレクラブ

(事務所) 〒 182-0005 東京都調布市東つつじヶ丘 2-39-11 アザレアヒルズ 203

(Tel/Fax) 03-3300-7234、(郵便振込口座) 00150-7-77254

(E-mail) pole2club@gmail.com、(HP) <http://polepoleclub.jp/>

(本 部) 〒 107-0062 東京都港区南青山 6-1-32-103

2020年度 事業報告／決算報告

【海外事業】



(写真左) タンザニアでコロナ感染者が確認された当初「コロナとの戦争」と報じる現地紙 Mwananchi (’20/3/20 版)

(写真上) 故郷チャトの町で行われたの故マグフリ大統領の葬儀の様様

概 要

2020年度のタンザニアでの活動は、世界を覆った新型コロナウイルス禍に翻弄され続けた1年でした。タンザニアでは2020年3月16日に初めて感染者が確認されると、その後5月7日までに509人まで感染者が拡大し、死者も21人を数えました。

タンザニアでは、初感染者が確認される以前から全国各地でセミナーを開催するなど対応を進めており、3月16日に初感染者が確認されると翌17日には全土の学校の閉鎖が命じられ、すべての人が集まる会議、イベント等の自粛を指示、公共交通機関にはアルコール消毒液の設置が義務付けられました。初動は極めて手際よく、かつ規制も厳格であったといえます。

この時点で現地事業も裁縫教室の閉鎖をはじめメンバーが集まることを禁止し、植林もごく限られた人数での分散実施に切り替えることになりました。

しかし状況をさらに悪くしたのは、タンザニア政府が2020年5月14日を最後に新型コロナウイルスに関する情報の公表を打ち切り「コロナフリー（コロナゼロ）宣言」を出したことです。この宣言後、それまでに採られていた規制措置は撤廃され、マスク着用、手指消毒、社会的距離の確保なども言われなくなりました。政府内であれ病院であれ、コロナを口にすることは実質禁忌となり、マスコミもコロナに触れれば発禁、放送停止、謝罪報道、罰金を科され、みな沈黙してしまいます。

こうした中で、村人たちは体調を崩して病院に行っても正しい診断を受けられず、まともな治療も期待できなくなっていくます。その一方で「タンザニアにコロナはない」が浸透してしまい、基本的な感染予防手段を説いても真剣に聞いてもらえない状況が生まれました。そんな中でできることは、活動のために村人同士が接触する機会を減らすことでしかなく、現地での活動は極めて困難となっていきました。

一方、現地の社会状況は活動の停滞を許さないものでもありました。とくに2020年10月に実施された国政選挙で国内の政治環境が大きく変わり（与党の歴史的圧勝）、新たな政治環境下での活動の足固めと方向性を打ち出していく必要に迫られました。キリマンジャロ山で地域住民が利用していた森へと拡大された国立公園の問題を解決していくためには、こうした国内政治環境への対応が不可欠となるためです。

しかしその対応を始めた直後、第2次政権を発足させたばかりのマグフリ大統領が急逝（2021年3月17日）するという、予想もしなかった事態を迎えます。元首が変われば国の方針も大きく変わる可能性があり、先が見通せない中で2020年度は終わることになりました。

つらかったのは活動を担う主要なリーダーやメンバーの中に、実際にコロナが疑われる症状で体調を大きく崩す者が何人かあらわれたことです。活動に支障が出るのはもちろんですが、何もしてあげることができず、当会としてはとにかく現場に寄り添い、少しでも活動の力になれるよう心がけました。幸い命を落とす者はいませんが、正しい情報を得られず、感染に対する対策も示されず、体調を崩しても適切な治療も受けられない状況に胸が痛みました。

1. 世界遺産キリマンジャロ山における国立公園の拡大にかかわる問題の解決および旧バッファゾーンの森における地域主体による森林保全・管理の実現に向けた取り組み

(1) 地域国家安全保障担当官（Regional Security Officer: RSO）との協議継続

●課題：

旧バッファゾーンの森“HMFS”（Half Mile Forest Strip）に対して行われた国立公園拡大について、解決に向けた突破口への鍵を握っていると思われる地域国家安全保障担当官（Regional Security Officer: RSO）。2019 年度にコンタクトを始め、協力を得られる前向きな感触を得ていたが、年度末に人事異動があり、後任の RSO との関係構築が急務とされている。コロナ禍による会合自粛の政府指示を受け、RSO との会合も困難となっているが、年末の大統領選挙が近づけば今年度中の会合は不可能となる。そのため、2020 年度前半のうちに会合を実現させ、問題解決に向けた動きに結びつけるようにする。

●結果：

後任 RSO とキリマンジャロ山の森林に沿う 40 村の地域連合である HAKIMAMA（Harakati ya Mlima Kilimanjaro kwa Mazingira na Maisha）代表によるミーティングを 2 回実施。しかし前任者と同様の反応を引き出すことができなかった。国政選挙を控え、政治情勢が見通せない中で余計な問題を持ち込むなどの雰囲気が多分にあった。問題解決への“突破口”として前任の RSO に初めて接触を試み、問題解決に向けた協力姿勢を得られるとの感触を掴んでいただけたに、人事異動後、後任者とも時機を逸することなく関係構築を急ぐべきとの判断が、選挙前に接触を急いだ理由であった。結果論となるが、後任者との接触を急ぐべきとの判断は拙速に過ぎたのかも知れない。

2020 年度の国立公園問題への対応はほとんどが RSO との連携、協力を前提としていたため、多くが頓挫する結果となった。RSO は慎重を要す相手であり、後ろ向きの雰囲気の中での接触継続は回避すべきとの結論にいたり、選挙後の落ち着いた時期にしていればとの悔いが残る結果となった。

こうしたことから、状況を打開し活動への展望を切り開くため、2020 年度は与党国会議員との関係構築に集中的に取り組んだ。国政選挙でキリマンジャロ州から立候補予定だった候補者 2 名と早い時期から会合を重ね、マニフェストに森の問題（国立公園拡大）の解決を盛り込んで貰うことに成功した。その後 2 名とも選挙で当選し、国会質問でさっそくこの問題を取り上げるなど、連携、協力の基礎固めはできつつある。また 2021 年 3 月に開催した HAKIMAMA の総会には国会議員 1 名がかけつけてくれた。

(2) キリマンジャロ州知事との協議実現

●課題：

アナ・ムグウィラ州知事とは知事が就任した 2017 年以来、面会が実現していない。就任直後に面会を求めたものの（HAKIMAMA の前身組織 KIHACONE (Kilimanjaro Half-mile forest strip Conservation Network) として）、州書記長から拒否され、さらに県および州によって KIHACONE が解散に追い込まれるに至り、面会は生産性がないと判断し見送っていた。しかし国立公園ワーデンによる村人の殺害などを受け、知事の態度にも変化が見られ、RSO との良好な関係が構築ができた場合、これを足がかりとして知事への面会を求めていくこととする。面会が実現した場合、HMFS 内での地域住民による植林許可を求める。

●結果：

RSO との関係作りが思うような結果とならず、州知事との面会も見送った（RSO は州内で起きている状況を直接大統領に報告できる立場にあり、RSO の理解をのみに州知事と面会に臨むことには大きな意味があった）。2020 年度は RSO とは別の形で活動への支持を固めていくため、与党国会議員とのパイプ作りに軸足を移して取り組んだ。国会議員とは、選挙前の候補者段階からコンタクトを取り、当選後も首都ドドマに HAKIMAMA 代表団を送り会合を持つなど、良好な関係作りが出来つつある。今後の州知事との面会にあたって後ろ盾となってくれる可能性は十分あると考えている。

(3) 大統領への直訴

●課 題：

RSO との協議が不調に終わった場合、残された問題解決の手段は非常に限られてくる。その一つは、国会でキリマンジャロ国立公園の範囲を規定している国立公園法補助法（GN278）の法改正を目指す方法であり、もう一つは大統領に直訴し、問題解決への決断を仰ぐ方法である。前者は数年の時間がかかるだけでなく、これまでの経緯からも様々な妨害や横やりが入り、動かない可能性が高く選択できない。したがって大統領への直訴を考える。年末の大統領選でマグフリ現大統領は再選されるとみているが、再選後の相当期間、大統領が面会に応じられる時間はないと思われ、大統領がキリマンジャロ州に選挙遊説で訪れることがあった場合、直訴を実行する。

●結 果：

タンザニアで選挙活動が活発化した 2020 年 9 月から、キリマンジャロ州から立候補予定の与党国会議員候補者との接触を開始、彼を通じて大統領への請願を行うこととした。そして選挙直前の 10 月 21 日、選挙キャンペーンでキリマンジャロ州を訪れた大統領に対して、国立公園拡大問題の解決を地域住民が望んでいるとの要望が与党候補者より直接大統領に伝えられた。これに対して大統領は「すべては選挙で与党が勝ってからのこと」（キリマンジャロ州は与党が勝てない野党の大地盤州）との回答であった。選挙の結果キリマンジャロ州を含め与党は圧勝、第 2 次マグフリ政権が始動した。これを受けてさっそく当選した与党国会議員と協力して 2 回目の直訴へと動こうとしていた矢先の 2021 年 3 月 17 日、マグフリ大統領が急逝。同大統領に決断を仰ぐという道は叶わなくなってしまった。

(4) HAKIMAMA への地域ブロック制の導入

●課 題：

キリマンジャロ山に暮らす地域住民の平和な暮らしと、HMFS での環境保全活動の実現を目指す地域連合 HAKIMAMA は、モシ県の森林に沿う 40 の村々により構成されている。今後の円滑な活動の推進のためには、これらの村々を 4 ブロック程度の地域にまとめた方が機動的な動きが取りやすくなる。そこで RSO との協議が順調にいった場合、HAKIMAMA への地域ブロック制の導入に取り組む。

●結 果：

RSO との協議が不調に終わったこともあるが、ブロック制導入のためには村々を集めて会合を重ねる必要があり、実質的なコロナ禍中では進めることができなかった。

(5) 他県との連携開始

●課 題：

RSO および州知事との協議が順調であった場合、HMFS の森林保全・管理において HAKIMAMA がキリマンジャロ山を囲むすべての県（ロンボ県、ハイ県、シーハ県）と協力していくための体制構築に着手する。2020 年度はこれら 3 県の県議会議員および県議会議長との関係づくりに取り組む。大統領選挙と同時に年末に国会議員・県議会議員選挙も行われるため、着手時期は新議員、新議長が揃う 2021 年に入ってからとする。

●結 果：

RSO との会議が不調に終わり、県境をまたぐ活動にはリスクがあるとの判断から、他県への働きかけは見送った。2020 年度は別の方法で地域的な活動への支持を固めていくため、国会議員との関係構築に軸足を移して取り組んだ。その結果、議員の選挙公約に森の問題の解決が盛り込まれるなど、この問題を地域の問題として、他県にも働きかけていくための一定の支持根拠を得ることができた。

なお、与党圧勝の選挙結果を受けて発足した新政権のもとで、足下のモシ県での HAKIMAMA の認知向上のため、モシ県知事と HAKIMAMA 代表の会談を行った。知事は森林に沿う村々の地域横断による環境保全活動および地域住民の生活、権利の向上を目指す HAKIMAMA の組織目的に対し賛同し、2021 年度に予定している HAKIMAMA の植林への参加を約束してくれた。

2. 植 林

(1) 植 林

●課 題：

2020 年度の植林は、新型コロナウイルスにより不要不急の外出が制限される中、実施がほぼ絶望的な状況となっている。一部の村でごく小規模、少人数に絞った上で実施できないか、可能性を探ることにする（各村の合計で 2,000 本程度）。

●結 果：

各村との協議の結果、植林は実施村を絞り、参加人数を小規模に抑え、かわりに植林日程を長期に分散して対応することとした。その結果最終的に約 7 千本の植林に取り組むことができた（下表）。一方、大雨季期間中に植林を終えることができなくなり、今後の活着率に不安が残る結果となった。今後コロナ下で植林にどう取り組むか、育苗数を含めて課題を抱えることになった。

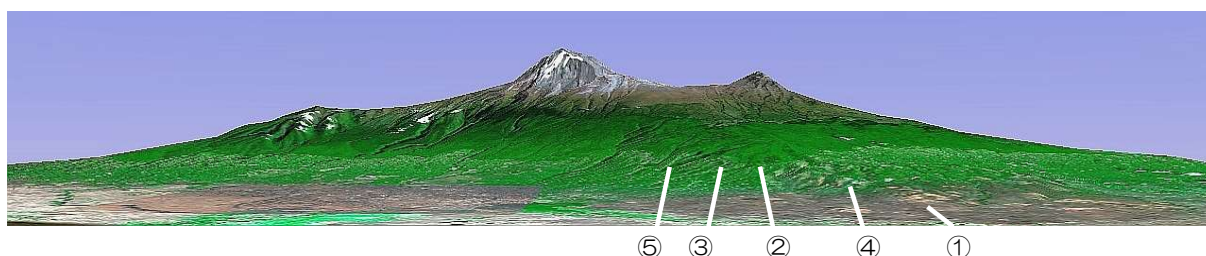
また 2020 年度は、キリマンジャロ山で大規模な森林火災が発生した（最下部写真）。この火災によりキリマンジャロ山の植生の 5 ～ 6%が焼失したといわれるほど大規模なものであった。これまで植林に取り組んできた植林地の一部でも火災が発生し、約 1,000 本が失われることになった。森林を失った尾根では、その後尾根を覆ったイネ科の雑草を焼き払いながら火が駆け登り、急峻な傾斜地にある植林地では防火帯も火が飛び越え役に立たない。森林を回復するには 20 年もかかるが、火災で失うのは本当に一瞬の出来事であった。

表1【植林実績】

村	本数	植林主力樹種（※）	植林場所
① ンガンジョーニ村	1,730	CL、CMe、CO、GR、ML、PP、SSi、TE	半乾燥地尾根緑化
② リヤコンピラ村	447	AF、CC、CL、CMa、MK、SSe	村内緑化
③ テマ村	2,572	CO、CMa、CMe、GR、PP	道路法面強化、教会敷地
④ マヌ村	1,000	GR、PP	裸地尾根森林再生
⑤ ンジャリ村	1,000	GR	学校緑化、 村内緑化
合 計	6,749		

※ AF=Acrocarpus Fraxinifolius（マメ科）、CC=Calliandra Calothyrsus（マメ科）、CL=Cupressus Lustanica（ヒノキ科）、CMa=Croton Macrostachys（トウダイグサ科）、CMe=Croton Megalocarpus（トウダイグサ科）、CO=Cedrela Odorata（センダン科）、GR=Grevillea Robusta（ヤマモガシ科）、MK=Makaranga Kilimandscharica（トウダイグサ科）、ML=Markhamie Lutea（ノウゼンカズラ科）、PP=Pinus Patula（マツ科）、SSe=Sesbania Sesban（マメ科）、SSi=Senna Siamea（マメ科）、TE=Trichilia Emetica（センダン科）

【図1】 キリマンジャロ山植林実施地



(2) 苗畑

●課題：

苗畑運営もコロナウィルスの影響により育苗作業の継続が困難となっている。このため、現在 8 カ所ある苗畑を半分まで絞り、4 苗畑体制（TEACA、マヌ、ムシリワ、ロレ苗畑）でできる範囲で育苗を維持するようにする。

○結果：

苗畑は TEACA、マヌ、ムエ、ロレの 4 カ所に縮小した（全体での育苗能力は 1.5 万本。従来は 2 万本）。一方、2020 年度は天候不順（大雨季中に起きた集中豪雨、大乾期中の大雨）とそれに伴うと思われる種子の発芽不良が重なり、育苗が遅延した。このことから 2021 年度の大雨季植林用苗木の確保に影響が出る恐れがある。

3. 養蜂プロジェクト

●課題：

2019 年度に着手した標準トッパー養蜂箱の製作は現場での実地指導が欠かせず、政府による外出や集会等の制限の解除、国際線の運行再開、コロナウィルス禍の落ち着きを前提として、再着手（製作を開始）する。その場合、日本からの資機材供給を実施する。

○結果：

養蜂グループメンバー（ロレ村）に体調を崩す者が出たことから、ほとんど活動ができなかった。3 月に 1 回のみ内検を行ったが、ハチの気性が非常に荒くなっており、手が付けられない状態であった。コロナ禍が去るまでグループによる頻繁な内検はできそうもなく、遠くからの目視確認だけでもできるように未営巣の養蜂箱のみ近場に移設した。ハチの気性が荒くなった背景には、長く人に触れることがなかったこともあるが、2020 年の天候不良のために蜜源となる木に花が咲かず、餌不足となったことが大きな要因と考えられる。

標準トッパー養蜂箱の製作は、現地の害虫であるハチノスムクゲケシキスイ（Small hive beetle）への対応のためにさらなる構造改良が必要となり、その設計が完了できなかった。

4. 改良カマド普及

●課題：

他の取り組みに比べて大人数やグループでなくとも設置作業自体は可能なことから、できる限り実施するようにする。この場合、カマド職人、設置要望世帯同士で合意ができることおよび資材搬入ができるかがネックとなる。設置対象村はロレ村、設置数は 10 基とする。また資材搬入が可能な場合、運送コスト削減のため、積載上限の 30 基分程度まで前倒し搬入を行う。

○結果：

計画通りロレ村に 10 基の改良カマドの設置を完了した。ただし大雨で大量の資材搬入が困難であったことから、資材調達量は設置した 10 基分のみに絞った。現在、現地で設置を希望される改良カマドは、ほぼ 100% 耐久性のあるレンガタイプとなっている。現地での資材価格の上昇に加え、政府の労賃基準の見直しに引きづられる形で職人の労賃も上昇しており、設置コストを圧迫しつつある。

ロレ村に設置された改良カマド



5. 裁縫教室

●課 題：

政府の命令によりタンザニア全土の教育機関が閉鎖されており、裁縫教室の再開もその措置の解除を待たなければならない。措置が解除された場合も年度の大半が閉校であった場合には、遅れを取り戻すことは実質的に不可能で、そのまま授業を再開させるべきかについて、現地カウンターパート TEACA（Tanzania Environmental Action Association）と協議が必要になる。

また 2020 年度は 7 月に寄宿舎の建設に取りかかる予定であるが、これもコロナウィルスの感染拡大の影響を受け、状況が厳しくなっている。具体的には資材調達ができるか、搬入手段が確保できるか、建設作業員の確保ができるか、作業人数を絞っての着工が可能であるか等である。TEACA がフォローにあたっているが、これらもコロナの状況次第であり、見通しが立つまでには時間がかかると思われる。ただし、いつでも着工できるよう資金支援は行うこととする。

○結 果：

タンザニアでは 2020 年 3 月 16 日に初めて新型コロナウィルスの感染者が確認されると、翌 17 日にはすべての学校が閉鎖となった。しかしマグフリ大統領（当時）が 5 月中旬に同国のコロナに関するデータの公表を打ち切ると、それまで採られていた学校閉鎖や国際線乗り入れ禁止などの感染拡大防止措置もすべて解除されていった。これにともない、裁縫教室も 6 月に再開された。しかし授業に 3 か月間のブランクが生じることとなり、再開後も多くの生徒が教室に戻らなかった（18 人いた生徒が 10 名まで減少）。再開後は授業の遅れを取り戻すため、休暇を削り授業時間を延ばして対応したが、すべてはカバーしきれなかった。

寄宿舎建設は 7 月に着手したが、大雨のため資材搬入が遅れ、またコロナのため建設作業員の人数を絞らざるを得なかったため、当初予定していた年内の完工は間に合わず、2021 年 1 月に完成した（収容人員 24 名、次頁写真）。

一方、寄宿生を含む生徒の募集は、コロナによる家計の落ち込みが大きく影響し、非常に苦労することとなった。学費の見直しなど徹底的にコストの削減を図り、年度末時点で 15 名の生徒が教室で学んでいる（寄宿生 8 名、通学生 7 名）。

6. 診療所支援

●課 題：

県政府による 2020/2021 年度のテマ診療所に対する予算執行状況を見た上で、診察 器具、薬剤のうち優先度の高いものへの支援を実施する。また村における疾病の発生状況を分析するため、県政府の許可が下りた場合、診療所から継続的に疾病データを取得するようする。

○結 果：

県議会議員による村への説明とは裏腹に、結局県政府による 2020/2021 年度のテマ診療所に対する薬剤予算はつけられなかった。診療所は薬不足に加え、コロナ感染を恐れる村人たちが敬遠するようになり、来診者数が激減する状況となった（月 160 名→ 30 名）。こうしたことから、当会は緊急性の高い薬剤の支援を 3 回にわたり実施。薬があることを聞きつけた村人たちは再度診療所を頼るようになり、年度末に向けて来診者数も回復しつつある（3 月時点で月約 100 名）。

なお、診療所に対する政府予算は 2020 年/2021 年度から診療所作成の計画に基づく年 4 回のバスケット方式に制度が変更となった。しかし選挙があったためか、あるいは大統領が急逝したことによる混乱のためなのか理由は不明ながら、診療所の計画作成を監督すべき州・県の医療委員会がまったく動いておらず、2021/2020 年度の薬剤調達についても不安を残している。

疾病データについては政府の情報に対する統制が非常に厳しくなり、取得を断念せざるを得なかった。こうした情報統制により、長年データを取ってきた雨量データも取得不可能となった。

7. トイレ建設

●課 題：

キリマンジャロ山麓ロレ村のロレ幼稚園より、トイレが老朽化し園児たちの利用が危険になっていることから、新しいトイレの建設について支援の要請が出されている。この建設のための資金確保に目処が立ったことから、2020 年度に建設を支援する。ただし、コロナウィルスの影響による資材および建設要員の確保ができた場合を前提とし、その目処が立たない場合には次年度に延期することとする。

○結 果：

予定通り建設を行った。ただし建設途中に県の指導で大幅な構造変更が必要となったことから、工期、予算とも大幅に狂うこととなった。完成したトイレは古いトイレの4倍ほどの広さがある清潔で堅固な造りで、村人たちからも非常に感謝されている。



(写真左) 完成した裁縫教室寄宿舎



(写真右) ベッドの搬入が始まったときの寄宿舎内部。このような大部屋が2つあります。



(写真上) ロレ幼稚園に完成したトイレ。写真の右側に写っているのが古いトイレ

(写真右) 完成したトイレで、園児たちに使い方を教えてあげている村人と先生



【国内事業】

概 要

2020 年度は新型コロナウイルスの影響で例年開催される国際協カイベントなどは軒並み中止となり、予定されていた講演会なども延期、中止となった。総会も初めて書面表決のみとせざるを得なくなるなど、人と直接接するような活動が一切できない一年となった（手工芸品チームも活動見送り）。また現地調査実施後は隔離期間はもちろんのこと、通常以上に感染防止に万全を期す必要があり、事務局は人の立ち入りができない状態であった。こうした状態はコロナ禍が収束するか、国内でのワクチン接種が一通り完了するまで続くと考えなければならず、会の活動、資金調達など多くの面で深刻な打撃となっている。

1. ニュースレター

●課 題：

ページ削減版で年 4 回の発行を引き続き目指す。また年 1 回、タンザニアの現場から直近の取り組み状況をお知らせするハガキ通信を継続する。

○結 果：

ニュースレターは 4 回発行の目標に届かず、3 回の発行にとどまった。内容は世界を揺るがし、現地活動にも大打撃を与えていた新型コロナウイルスと無縁にはなれなかったが、それ以上に、コロナの情報をまったく出さないというタンザニアの異常な状況下で、同国の様子を当会なりの視点で分析し、お伝えすることにとくに力点を置いた。現地からのハガキ通信は、予定通り 1 回実施した。

2. イベント出展

●課 題：

例年通り「グローバルフェスタ」が開催される場合、これに出展し、キリマンジャロ山での国立公園拡大にともなう問題およびその解決に向けた当会の取り組みについて展示、説明を行う。

○結 果：

グローバルフェスタは新型コロナウイルスのため開催中止となり出展できなかった。

3. ぽればれカフェ

●課 題：

コロナウィルスの影響が収束し、人が集まれる環境が戻った場合に限り実施する。2 ヶ月に 1 回を基本とし、昨年に続いて「スワヒリ語に気軽に触れられる」、「現地と直接繋がる」をコンセプトとする。

○結 果：

新型コロナウイルスが収束せず、開催できなかった。2020 年 11 月に、収集活動で長くご協力いただいている大阪府吹田市社会福祉協議会を対象としてウェビナーでの活動報告会を開催した。

4. ホームページのリニューアル

●課題：

現行のホームページを「シンプル」、「分かりやすい」をコンセプトにした新ホームページに全面改定する。

○結果：

ページ作成はほぼ完了した。ただしまだ技術的に解決しないといけなかった問題があり、Web 作成ボランティアの力を借りて解決に取り組んでいる。2020 年度中にはこれらの解決に至ることができなかった。

5. 現地プロジェクト視察／ホームステイ受け入れ

●課題：

現地渡航が可能となった場合、昨年に引き続きキリマンジャロ山麓ロレ村でのプロジェクト視察／ホームステイの受け入れを実施する。募集はホームページ上での一般応募とする。また昨年は会員と非会員の区別がなかったが、会員には 1 割の割引制度を導入する。

○結果：

新型コロナウイルスのため実施できず。受け入れの再開には今後のタンザニアでのワクチン接種状況なども考慮しなければならず、当面無理と考えざるを得ない。

6. その他

●課題（1）：

収集活動への協力呼び掛けを全国の労働組合関連団体に対して行う（約 700 力所）。

○結果：

計画通り実施。いくつかの労働組合が協力を始めてくれた。

●課題（2）：

パンフレットの改訂

○結果：

当初見送る計画であったが、収集活動の労働組合への広報にあたり改訂版の使用が望ましかったことから、収集活動広報パンフレットとともに各 3 千部を作成し、会員を含め配布した。

新たに作成タンザニアパンフレット →



●その他

SNS の運用の見直しを行い、とくにツイッターはタンザニアに関わるホットな情報を毎日もしくは隔日ペースで流すように改めた。これまで平均アクセス数は百件程度だったが、現在多い日は千件を超えるようになり、フォロワーも少しずつ増えている。また、なかでも重要な情報、あるいは当会で説明を加える必要のあるものは、フェイスブックでも情報を共有しないしは詳細を流すようにした。こちらは多少アクセス数は向上しているが、フォロワーの増加は微増にとどまっている。



タンザニア・ポレポレクラブ

(事務所) 〒182-0005 東京都調布市東つつじヶ丘 2-39-11 アザレアヒルズ 203
(Tel/Fax) 03-3300-7234、(郵便振込口座) 00150-7-77254
(E-mail) pole2club@gmail.com、(HP) <http://polepoleclub.jp/>
(本 部) 〒107-0062 東京都港区南青山 6-1-32-103